

気球船



第 221 号
平成 20 年 6 月
文 部 科 学 省
初 等 中 等 教 育 局
国 際 教 育 課
編 集 ・ 発 行
初版発行昭和62年12月

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

世界の窓

子ども達の大きな笑顔を

ホーチミン日本人学校
校長 有城 美晴

ホーチミンは今、雨季です。ところが、ここ数日、なかなか中心部では雨が降ってくれません。そのためとても暑い日の連続です。日中は体温以上の暑さです。

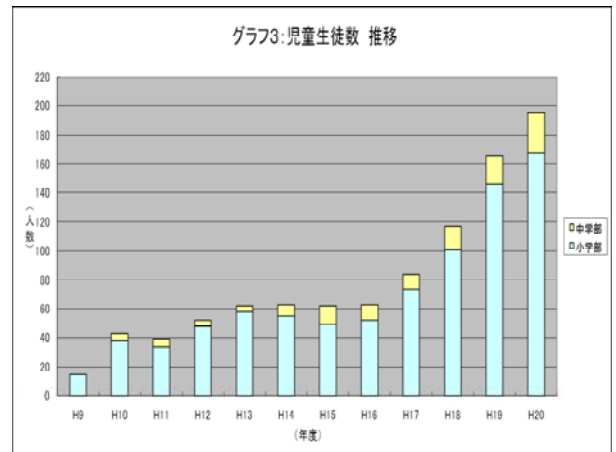
その名も「マンゴースコール」は、豆台風のような短時間のスコールで、円形状の黒い雲から始まります。目も開けられないぐらいの突風と雷鳴の後、雷が光り、まもなくとても大きな雨の粒が落ちてきます。ホーチミン名物「オートバイの洪水」もそのときだけは途切れます。また、道端のタバコ売りが一瞬でカップ売りへと変身します。

6月は待ちに待ったライチのシーズンでもあります。フルーツ天国のホーチミンでもライチだけは6月から7月中旬までの期間限定です。去年はライチの豊作で、このことが逆に生産者泣かせのようでした。今年も昨年のように安くはないので、収穫も例年並みというところでしょうか。しかし物価は食品価格を中心として高騰傾向です(5月は消費者物価指数の対前年比伸び率25.2%)。

ホーチミン日本人学校は中心部の南、ナムサイゴンに位置しています。隣は台北学校、その隣は韓国学校、近くにはインターナショナルスクールがあり、緑美しい文教地域の様相を呈しています。

本校は12年目を迎え、6月末現在、児童生徒数は200名になりました。日本企業におけるベトナム進出の拡大とともに日本人学校の児童生徒数も確実に増え続けています。

グラフ3:児童生徒数 推移



※1

上記人数は、該当年度の年度初め(4月～5月時点)での人数(但し、H9は6月時点、H10は9月時点での人数)

※2

長期滞在者・永住者の区分けは本校では特におこなっていない

急激な児童生徒数の対応に、校舎の増築が悲願でした。そしてやっとこの4月に竣工式にこぎつけました。この間あらゆる所で、邦人の方々の日本人学校に寄せる熱い思いを目の当たりにしました。特に領事館、商工会の運営委員長はじめ建築部会の方々やPTAの方々、ベトナム関係機関の方々にはお世話になりました。また、ベトナムの方々との折衝では、日本人学校のベトナム人スタッフのすごさやベトナム流折衝気構えも勉強になりました。

【朝の活動(8:15～8:25)の時間でのこと】

朝の活動のひとつに群読朝会があります。

群読の取り組みを通して、各クラス内で協力や協調といった集団性を育てています。

6月には2回目の群読朝会があり、発表は4年2組「花さき山」と中学部3年「いろいろな言葉での挨拶」でした。短い発表の中に笑いやペースもあり、聞き手を十分にひきつける創意工夫がされたものとなりました。



また、見る側にとっても次の発表のよい刺激になります。

このようにますますお互いが競い合うことで、お互いのよさを見つけ、自分達のことを振り返るきっかけになればと願います。子ども達の周りには中学部のお兄さんやお姉さんがいることも大きな刺激です。



朝の活動には、群読朝会の他にもうひとつ音楽朝会があります。

ここでも各学年の発表があります。また、教師からの発表もあり、教師の奮闘振りも楽しみの一つです。次回は男性職員による「モルダウ」の合唱です。子ども達から「先生達、すごいですね。」の声が聞こえてきそうです。

自分達の作り上げた作品が、聞き手の心をつかんだと感じたとき、子ども達は苦心した分だけ達成感を味わいます。

そして教室に戻った子ども達の、やり遂げた後の笑顔がとても素敵なのです。そんな経験のでき

る場の提供をたくさんしたいと思います。

【総合的な学習の時間でのこと】

「どのように遊ぶのですか？」と子ども達が本校のベトナム人スタッフに聞いています。「何をしているの？」と聞くと、「今、総合学習でベトナムにはどんな遊びがあるのか聞いています。」と答えてくれました。そういえば、先日もガードマンの方にベトナム語で「ダーカウ」(羽を足でけて遊ぶ)という遊びのコツを聞いていました。

また、ある学年はベトナムの果物を調べています。今のところ10種類の果物を調査中との事です。

中学部ではベトナムのチェー(ぜんざいのようなもの)を調べていました。市内の大きな市場までにチェーを試食に行き、次回は自分達でそれを料理するとのことでした。



ベトナムでしか経験できないことをしっかり吸収し、そこに暮らす人たちや思いを理解し、また自分の事、自分の生まれ育った国や地域に思いをはせ、何か得るものをつかませたい。そしてそこから発信できる子ども達になればと強く希望します。

そのためにも子ども達の大きな笑顔を励みに今日も奮闘している職員集団がここに存在しています。感謝。

特別寄稿

これからの日本の教育を考える
～日本人学校長を経験して～

西田 稔
前ブカレスト日本人学校長
(現在:山口県教育庁義務教育課)



【はじめに】

ブカレストは東欧ルーマニアの首都で昔バルカンの小パリといわれた美しい街です。そのブカレスト市に住む邦人の数は約300人で、ブカレスト日本人学校にはその子弟が全員通います。児童生徒数は毎年20人前後という小規模校です。私はそのブカレスト日本人学校に第十代目校長として、平成17年度から平成19年度までの3年間派遣され、この3月に帰国しました。



在外教育施設で勤務した経験が私の人生にどのような影響を与え、また今後その経験をこの日本でどう生かしていこうと考えているのか、今の気持ちをお話したいと思います。

【私が在外教育施設派遣を希望した理由】

まず私が在外教育施設派遣に応募したきっかけですが、それは吉田松陰先生の影響です。松陰先生は幕末の長州藩で松下村塾を開き、幕末から明治にかけて日本の新しい時代を創った高杉晋作、木戸孝允、伊藤博文や山県有朋らを育てた教育家です。

その松陰先生の言葉に「飛耳長目」(ひじちょうもく)という言葉があります。これは「しっかりアンテナを張り巡らして情報収集せよ、そして自分の耳と目を使って自分で確かめよ」という意味です。幕末の動乱の時代、松陰先生は自ら外国を知る必要があると考え、鎖国中の日本に來航したペリーの船に乗り込もうとしました。その密航計画は結局失敗に終わってしまいますが、その熱い思いと実行力には胸を打たれます。

それから約150年経った現在、まさに国際化やグローバル化が急速に進む中で、私も松陰先生と同じように一度海外に出て、外から日本を見直すことの必要性を感じ、在外教育施設で海外子女教育に携わりたいことを希望しました。

【国を左右する教育】

私が派遣されたルーマニアは、ドナウ川がゆったりと黒海に流れ、世界遺産ドナウデルタを抱える自然豊かな国です。面積は日本の本州ほどで、気候は夏は暑く、冬は寒さが厳しくて、春と秋は期間が非常に短いのが特徴です。またルーマニア人は東欧では唯一のラテン系民族で、陽気で明るい国民です。1989年の革命を契機に内政が大きく変わり、2007年にEUに加盟するなど西側先進諸国に近づきつつあります。



がいせん門と大通り

そのような国ルーマニアと日本では、暮らし方や考え方に大きな違いがあり(どこの国にも違いはあり当然のことなのですが)その違いを理解して慣れるまでには少し時間がかかりました。

例えば、日本では、水は水道の蛇口から当たり前前に飲めますが、この国では水道水は飲めないため、水は店で買うことになります。ガスが止まることもよくあります。道路は穴が多く、水はけが悪いので雨降りの時は穴がどこにあるのかわかりません。ですから車は気をつけて走らなければなりませんでした。まだまだルーマニアはインフラが十分に整備されていません。

また、道路に落ちているゴミを人は拾うことはありません。ルーマニアでは、ゴミを集める仕事をしている人の仕事を取ることになると教えられているからです。ゴミの処理については、各家庭は燃えないゴミも燃えるゴミも分別せず全て一緒に出します。それがこの国で許されているのは、すべてを一緒に処理してしまうからです。

それから、ルーマニアには自動販売機がありません。自動販売機を路上に置くと、一晩のうちに機械ごと持っていかれてしまうからです。スーパーのレジはいつもお客の長蛇の列です。店員がおしゃべりをしていて、レジを打ってくれないことが多いからです。人を待たせていても平気なのです。日本ではまず見られない光景ですが、お客はだれも文句を言いません。

これらは生活スタイルの違いのほんの一部ですが、それらを経験することで私が学習できたことがあります。例えば、「耐える心が育つ」というこ

と「ものを大事にすること」そして「教育の重要性」です。

日本人の精神文化もすばらしいものがありますが、日本では最近、「耐える心」や「ものを大事にする心」が稀薄になっています。私は、在外で不便なことを数多く経験することで耐えることを学び、水一滴でも大切にするなど、ものを大事にするようになりました。教育現場に厳しい環境状況をあえてつくることも、時には必要かもしれないと思っています。

また、ゴミの問題、環境問題、道徳倫理の問題などは、ルーマニアの学校現場において教育されていないことによるものですから、あらためて教育の重要性を感じています。教育は人をつくり国をつくると思っています。国の教育力の低下は、その国力の低下に直結しますので、教育に携わる者としてあらためて強い使命感と責任を感じたところです。

【子どもには世界に通用する力を】

ブカレスト日本人学校には、親の転勤に伴い、日本から来てまた日本へ帰る子やトルコから来て次はアメリカへ行った子、またベトナムやドイツなどの国から編入して、次は世界の別の国に行く可能性のある子など、いろいろな子がいました。

ですから、在外で学ぶ子どもたちには、日本を含めて世界のどんな国に行っても通用する力をつけることが必要でした。世界で通用する力とは「高い学力」はもちろんですが、「他人や他国の人と一緒にやっていける能力」や「どんな状況になってもへこたれないたくましい精神力や体力」と考えています。これらは、現行の学習指導要領や新学習指導要領の教育理念である「生きる力」に重なります。

私は在外で学ぶ子どもたちにとって、その力は特に重要であり、日本が今後世界をリードしていく上で「世界に通用する力」すなわち「生きる力」の育成は欠かすことはできないと考えています。

言い換えれば「生きる力」の育成を失敗すれば、日本が世界から取り残されてしまうことになる

とも言えるわけです。

日本の教育において「世界で通用する力を育てること」これは、私が在外の教育施設に勤務して意を強くしたことのひとつです。

【日本の文化が語れるか】

在外に出て初めて日本のよさやすばらしさに気づくことがあります。私は日本を離れて日本は大変優れた国であり、日本人は優れた国民であることを痛切に感じました。日本のインフラ整備や日本のソフトパワー、そして日本人の細やかな心遣いや気遣いは世界に誇れるものです。在外での勤務はそのことに気づかせてくれました。

日本のアニメはどこの国でも大人気でしたし、日本のことを学ぶ学生たちにも多く出会いました。ブカレスト大学の学生は世阿弥について学んでおりましたし、俳句や歌舞伎について尋ねられ、返答に窮することもありました。日本の伝統や歴史に裏付けされたよさやすばらしさを私たちはもっと理解し、大事にしなければいけないと思います。自国の伝統や文化について本物を知ることが、やはり大事だと思います。

日本の文化を学ぶ外国人に、自国の文化を語れる日本人を育てなくてはなりません。日本のよさやすばらしさを理解し、誇りをもつ子を育てたいと思います。

【最後に】

私は、自分自身が日本人なのに日本のことがよくわかっていないということを痛感しています。今後も私自身が学びを続けていながら、私たちの国「日本」そして「日本人の心」がどんなにすばらしいかを次代を担う子どもたちに伝えていくと同時に、日本人であることに対して誇りや自信をもたせ、一方で、外国語活動や外国の文化を理解する場や機会をできるだけ多く与えることをしていきたいと思います。

在外勤務の機会を与えてくださった方々に感謝し、今回の在外での勤務が日本の子どもたちの今後の教育に生かされるよう、今後も努力してまいりたいと思います。

知らせることで切り拓く
開かれた学校をめざして

小原 寛
前サンチャゴ日本人学校長
(現在:青森県南部町立福地中学校長)

【はじめに】

新芽が息吹、日毎に葉の色が変化する日本の自然美に目を見張る帰国後の3ヶ月である。

家族のいとおしさ、ふるさとの素晴らしさなどかけがえのないものであることは、分かっていたつもりである。しかし、あらためてその大切さに気付かされたサンチャゴ日本人学校3年間の派遣であった。

今回は、二度目の派遣で、少しはきもちにゆとりがあるつもりでいた。しかし、前回は教諭として、今回は管理職としての立場の違いなのか、実際にはゆとりなど持つゆとりがなかった。

【1度目の派遣－教諭として】

前回は1989年から3年間フランクフルト日本人国際学校で素敵なスタッフに出会うとともに、ベルリンの壁の崩壊という歴史的場面にも遭遇した。また、子ども一人一人に目を配り、子どもの立場を第一に考えて指導に当たることの大切さを保護者や子どもたちに教えてもらった。例えば「注意しようと思う子どもの行動には、教師が納得できる子どもの理由がある」ということである。それまでの私は、学年11クラスという大規模校に慣れてきていて、子どもの声に耳を傾ける余裕がなく、問答無用の指導(?)であったような気がする。

帰国後の学級経営や部活動指導に大きく影響したことは言うまでもない。

【2度目の派遣－管理職として】

やがて、また何か新しいことを得ることに期待して、再派遣を希望した。しかし、本県では教諭での再派遣は原則としてないらしいことを知り、在外教育施設派遣のために管理職登用試験に挑戦することにした。それから、9年が経ち2005年3月

に南米・チリ・サンチャゴ日本人学校派遣のチャンスが訪れた。思いが通じ、現実となることに驚き、体が震えたことを覚えている。

折りしも、その当時は「説明責任」という言葉を耳にすることが多かった。説明責任があると云われると、何かしら説明の後に要求が貼り付いてくるような感じを受け、身が縮む思いでいた当時の私であった。

サンチャゴへの赴任当初から、保護者等から教育活動について要望が寄せられた。赴任したばかりで、現地の状況もよく把握していないにもかかわらず、お構いなしで話が飛び込んでくる。

日本人学校に子どもを在籍させている保護者にとっては、いつ日本に帰るか、あるいはよその国へ転勤になるか分からず、問題や要望があれば、一刻も早くその解決に向けた取り組みを学校に願ひ出るのは当然のことである。

でも、なぜこんなにも要望や質問が出るのか？ 派遣教員は勿論のこと現地採用の先生方も一生懸命にアイデアを出して、それなりに指導や活動がうまく行われているのと思っていた。

しかし、保護者の方々と接する機会を重ねるごとに、少しずつその原因が分かってきた。

それは、各教育活動におけるねらいと指導方法をきちんと知らせていないのではと思った。その点に留意しながら、保護者集会等があるごとに、ねらいや方法、さらにその後の指導にどうつなげるか等を知らせることに専念した。

最も代表的な例としては、教育課程編成のあり方であった。学校行事の日程等は、前年度に計画がなされ、主な行事等は内容まである程度検討され、次年度に実践される訳だが、ある行事について日程と内容の変更まで要望として挙げられたことがあった。そこで、教育課程編成の意義を説明した経緯がある。

そのように知らせることに努めた結果、かなりの部分で理解してもらえるようになった。そして、要

望等が2年目には激減した。知らせることで保護者と学校の信頼関係を築くことが出来ることを確信した3年である。

このことは、お互いの考えを正面から言える雰囲気を持ったサンチャゴ日本人学校であればこそ経験できたことであり、当時の方々に感謝する次第である。

【2度の派遣を振り返って一帰国後の今】

私のキャッチフレーズは「計画は緻密に、実行は大胆に」である。学校は、行事などの計画において、とかく昨年どおりで提案されることが多い。

しかも、提案時にねらいを協議することもなく、ややもすると、確認さえしないでねらいをお飾りのごとく取り扱うこともある。そんな姿勢で取り組んでいたのでは、説明どころではないであろう。

その点では、現任校でも十分注意する必要があると感じている。多忙感に包まれた本校の職員たちであるが、全教育活動において、それぞれにおいてねらいを明確にして、教師間でさえも知らせることを怠らず、教育活動を進めて行くことで成就感を感じ、多忙感も少しは解消されるのではないかと期待している。

今後は、在外教育施設で得た実的な経験を現任校に活かし、保護者や地域の人々や教職員と向き合い、校内外に知らせる学校運営に努める所存である。



「暑い季節に、せめて涼しい写真を・・・」山形蔵王の樹氷①

事務連絡

長期休業期間中の安全対策について

在外教育施設指導係 荒井 忠行

世界各地では自然災害、テロなどが数多く発生しております。在外教育施設のある国も例外ではありません。

5月には、ミャンマーでサイクロンによる被害が発生しました。また、中国の四川省では大地震が発生しました。6月には、イスラマバード(パキスタン)市内で爆弾テロが発生しました。

在外教育施設における安全対策については、当該地域の事情に応じて、在外公館や現地邦人社会等と連携をとりつつ、日頃から必要な対策を講じることが肝要です。

6月下旬から長期休業期間に入る在外教育施設は多いですので、派遣教員及びその家族の皆様におかれましても、任地を離れる機会が多くなると思われます。

長期休業期間の前には、緊急連絡体制の確認など、安全対策について改めて点検し、安全の確保について格別のご配慮をお願いします。

もしも緊急事態が発生した場合は、在外公館、現地警察・消防当局等に連絡するとともに、国際教育課にも必ずご連絡ください。夜間及び休日の場合は、緊急連絡受付票の連絡先にもご連絡ください。

平成20年度在外教育施設教員派遣にかかるスケジュールについてお知らせします

教職員派遣係 西尾 佐枝子

平成20年度の在外教育施設への教員派遣に

かかるスケジュールについてお知らせいたします。

なお、本スケジュールについては諸般の事情により変更する可能性がありますことをご了承願います。

【選考試験について】

〔管理職〕

(東京会場のみ、文部科学省)

平成20年7月22日(火)、23日(水)、25日(金)

〔教諭〕

(東京会場、文部科学省)

7月28日(月)～29日(火)

8月4日(月)～6日(水)

(大阪会場、ホテルプリムローズ大阪)

8月18日(月)～20日(水)

(福岡会場、KKRホテル博多)

8月21日(木)～22日(金)

【派遣先の決定について】

〔管理職〕

平成20年11月下旬頃

〔教諭〕

平成20年12月上旬(登録者)

同 下旬(即派遣者)

【各種研修会】

〔登録者研修会〕

平成20年8月1日(金)

於;学術総合センター

〔内定者等研修会〕

平成21年1月11日(日)～15日(木)

於;国立オリンピック記念青少年総合センター

〔管理職研修会〕

平成21年1月26日(月)～30日(金)

於;国立オリンピック記念青少年総合センター

〔配偶者研修会〕

平成21年1月17日(土)

於;学術総合センター

【辞令交付式】

〔管理職〕

平成21年3月12日(木)

於;東京都内(会場は未定)

[教 諭]

平成21年4月3日(金)
於;東京都内(会場は未定)

「帰国生のための学校説明会・
相談会」のご案内

海外子女教育振興財団

海外子女教育振興財団では、今年も東京・大阪・名古屋にて恒例の「帰国生のための学校説明会・相談会」を開催いたします。

各会場では、国内の小学校・中学校・中等教育学校・高等学校・大学までの主な帰国生受入校の担当者が、すでに日本に帰国した、または海外から一時帰国している子どもたち(小学生～高校生段階)を対象とした、帰国生の進学に関するきめ細かな説明や相談に応じます。

入場は無料、もちろん保護者だけでなく、子どもの同伴も可能です。

特に、在外教育施設の先生方におかれましては、この7月に一時帰国または帰国される予定の方にお伝えいただくほか、進路指導担当の先生方も情報収集の機会として役立てていただければと存じます。

○東京会場

2008年7月29日(火) 13:00～16:30まで

場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京都渋谷区代々木神園町3-1)

最寄駅: 東京メトロ千代田線「代々木公園」駅又は小田急線「参宮橋」駅から徒歩8分

13:00 受付開始

13:00 学校別ブースに分かれての個別説明・相談 (～16:30終了)

13:30～14:00 財団教育相談員による講話『学校選択について(仮題)』

○大阪会場

2008年7月23日(水) 13:30～16:30まで

場所: 大阪YMCAホール(大阪府大阪市西区土佐堀1-5 大阪YMCA会館2階)

最寄駅: 地下鉄四つ橋線「肥後橋」駅又は地下鉄御堂筋線「淀屋橋」駅徒歩7～13分

13:00 受付開始

13:30 財団教育相談員による講話『帰国生受け入れの概要について(仮題)』

14:00 学校別ブースに分かれての個別説明・相談 (～16:30終了)

○名古屋会場

2008年7月24日(木) 13:30～16:30まで

場所: 名古屋国際センター(名古屋市中村区那古野)

最寄駅: 地下鉄桜通線「国際センター」駅下車又はJR・名鉄・近鉄・地下鉄「名古屋」駅から徒歩7分

13:00 受付開始

13:30 愛知県教育委員会による講話『愛知県立高等学校における帰国生受け入れの概要について』(予定)

14:00 学校別ブースに分かれての個別説明・相談 (～16:30終了)

お申し込みは財団ホームページからお願いします。また、参加校も掲載しております。<http://www.joes.or.jp/>

(財)海外子女教育振興財団 情報サービスチーム

E-mail sanka@joes.or.jp

TEL +81-3-4330-1349

FAX +81-3-4330-1355



「暑い季節に、せめて涼しい写真を・・・」蔵王高原の樹氷②

編集
後記

今月号は、在外教育施設へ管理職として赴任し、今年3月に帰国した先生方に特別寄稿をいただきました。

御経験に裏打ちされた言葉はどれも力強く、まさに正鵠を射ていると感じました。

昨年度、ある管理職からいただいた E-MAIL の中に「教育とは涙なり」という言葉があり、約1年経た今でも「自分なりの解釈」を試みています。

今回のような特別寄稿や E-MAIL 等で、先生方の御経験をお聞きすることは私にとってかけがえない財産となっています。

さて、最後となりましたが、今月号は教職員給与係が担当いたしました。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



国際教育課「気球船」編集部
本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。
連絡先：E-mail:kokukyo@mext.go.jp
こちらも随時募集中です。
○投稿記事
（原稿料は出ません。ご了承ください。）
○新規配信依頼



- お願ひ○
・本誌は、回覧、転送等して、多くの方でご覧ください。
・特に断り書きのない記事については、転載は自由です。

～～6月号の内容～～

【世界の窓】-----1

- 子ども達の大きな笑顔を -----1
ホーチミン日本人学校
校長 有城 美晴

【特別寄稿】-----3

- これからの日本の教育を考える -----3
西田 稔
前ブカレスト日本人学校校長

○知らせることで切り拓く開かれた学校をめざして -----5

小原 寛
前サンチャゴ日本人学校校長

【事務連絡】-----7

- 長期休業期間中の安全対策について -----7
在外教育施設指導係 荒井 忠行

○平成20年度在外教育施設教員派遣にかかるスケジュールについて -----7

教職員派遣係 西尾 佐枝子

○「帰国生のための学校説明会・相談会」のご案内 -----8

海外子女教育振興財団

